2024年8月の総評に代えて

〇林　　桂〇

●桜望子●（山形県　30歳）

祈るように暮らす
もらったすももを
傷がつかないよう
そっと洗っている

【評】「祈るように暮らす」という丁寧な暮らしぶりを「傷がつかないよう／そっと洗っている」に込める。「すもも」という小ぶりのマイナーな果物の選択もそれに添う。

●羽水繭●（大阪府　44歳）

眠たさとたたかわないで眠る日の
ナイフを離すようにひらく手

【評】眠気に身をまかせて眠る。ある意味で無防備な姿を「ナイフを離すようにひらく手」で表現する。心のナイフを握りしめながら、私たちは生きていることに気づかされる。

●池田　遥●（大分県　22歳）

この部屋を
明日には出ていく私
靴下だけ干す

【評】「靴下だけ干す」に、最後の夜を描く。感懐を描かない乾いた感情。それは思いの深さを閉じ込めたものだろう。

●水嶋　理●（埼玉県　23歳）

就職できなかった町の物件の
ブックマークをそのままにする

【評】その町で就職して暮らす青写真はできあがっていた。住むべきアパートの候補もできあがっていた。就職がかなわずに、その青写真も消えてしまったが、その心残りを「ブックマーク」に残しているのだ。

●あじさいソーダ●（山梨県　21歳）

文末に　添えた
「あはは」が乾いてて
傷の深さを測りかねてる

【評】メールの文末に添えられた「あはは」は、自らを笑う言葉なのだろう。それは明るさを装っているように見える。その明るさに、むしろ深い傷を隠しているのではないかと感じているのだ。繊細な感情のやりとりだ。

●睦月　雪花●（愛知県　36歳）

ぎんいろのきつねのしっぽ
ゆらゆらと
まどろむような嘘を聞かせて

【評】「ぎんいろのきつねのしっぽ／ゆらゆらと」は、「まどろむ」を導き出すための序詞のように働いている。その「まどろむ」も「嘘」の比喩となっている。「聞かせて」欲しい「嘘」は、虚実皮膜の「夢」の用に響く。

●宮﨑　莉々香●（神奈川県　27歳）

日は縦に落ちて水着を絞りきる

【評】「日は縦に落ちて」が印象的。横に落ちる「日」はなく、すべて縦に落ちるものである。それを当たり前のように思い、考えることもない。しかし、こう言われると、世界は新しく見える。「沖に／父あり／日に一度／沖に日は落ち」（高柳重信）の一日に一度落ちる太陽

に遭遇したときの驚きを思い出す。

●齊藤　栞●（埼玉県　16歳）

文庫本を書架へ戻して月鈴子

【評】「月鈴子」は、鈴虫のこと。この美しい言葉を見つけたことが、作者にこの一編をもたらしたのかもしれない。読了は鈴虫の鳴く夜に思いが還ることでもあるのだろう。

●入山　夜鷸●（宮城県　22歳）

泣きやめ泣きやめ、
狐の子。
お嫁の足元、
雲がたつ。

【評】童謡だろう。「雲が立つ」への飛躍が、一編を不思議な世界に導く。子どもなら、不思議なく、そのまま受け入れるのだろう。

●伊豆下田●（神奈川県　55歳）

シーン、
シンシンシンシンシンシンシンシーン
せみくん、
君うるさいんだよ。

【評】みんみん蝉なのだろう。作者が「シーン」と聞きなしたものは、普通「ミーン」と聞きなされているものだ。それを「シーン」と聞きなしたことが、最後の一行を生んでいる。静謐を表す漫画の場面に「シーン」と最初に書き入れたのは、手塚治虫だという。しかし、実際に音として表現されれば、こうなる。

●大須賀　潤子●（兵庫県　54歳）

夕日　お山に食べられちゃう？
大丈夫　明日も会える
あの時のじいじのおんぶ

【評】お祖父さんに背負われた幼い頃の記憶。山に沈む夕日を、山に食べられてしまうように見えた幼い不安を、祖父は「大丈夫明日も会える」の言葉で解消してくれたのだ。それは祖父に対する限りない信頼に基づいている。作者が懐かしんでいるのは、この信頼だろう。